

家畜飼料としてのサツマイモ

開発途上国ではサツマイモはさまざまな型で家畜の飼料とされる。が、残念なことにこれについての正確な統計はない。乏しい情報ではあるが生産農家ではふつう根（いも）、つる、葉は加工しないでそのままブタやウシの飼料とし、ときとして発酵させて給与し、またはでん粉かすをそのまま飼料として用いることもある。

全世界的にみて生産量のおよそ1/3が飼料とされるが、この比率は大生産国の中国とブラジルでの用途がどのように変わるかによって大きく影響される。全生産量のうち飼料の占める割合は中国40%、ブラジル35%、マダガスカル30%、韓国17%、ベトナム10%、その他の国では5%ないしそれ以下である。1960年代より開発途上国総体で飼料としての消費が増えてきているものの、最近30年間では中国と韓国をのぞく他の国々での消費の増減はあまりない。

アフリカにおける、サツマイモの飼料としての利用状況については、情報はきわめて少ない。生産されたいものほとんどは人間の食糧として用いられ、ただ傷いもだけが飼料にまわされるだけである。エジプト、ケニア、モザンビーク、ルワンダ、ウガンダなどの諸国ではつると葉はウシの飼料となり、比率としては低いもののブタや小家畜にも給餌される。が、つるや葉のほとんどが飼料にされるわけではなく、農家では人間の副食物として多く用いられるし、ときにはつるや葉を畑を肥やす目的で用いることもある。

アジアでは、いもはブタの飼料として多く用いられ、つるはウシに与えられる。飼料のほとんどは農家レベルで生産され、わずかに他の素材との混合飼料が工業生産される。

中国でサツマイモが飼料として多く用いられるようになった理由としては次のことが考えられる。

- ・穀物生産が増加したので、従来穀物を補う食糧として消費されてきたサツマイモの量が減ったこと。
- ・畜肉とくにブタ肉の需要が増えたため、飼料としての用途が増加したこと。
- ・政策の変更により余剰農産物を有利に販売し、利益を得ることができるようになったこと。
- ・ヨーロッパ連合と中国との合意により、1980年代より年間60万トン以上の乾燥サツマイモが無関税でヨーロッパの関係諸国に輸出されるようになったこと。

ラテンアメリカ諸国では、いも、つる、葉ともに飼料とされる。これらの国では多くは小農または家庭菜園で生産され、主として食糧となるが、残余はブタやウシの飼料となり、また収穫後の畑に放されたブタが自ら残りいもを掘り出して食べることもある。いずれにしても、いもは煮るなどの手を加えられることなく生のままで給餌されるが、最近ではうす切りにして乾燥させたサツマイモにモロコシなどの穀物を加えたものが、ニワトリなど家さんの経済的な、また栄養に豊かな飼料として注目されている。（編集部）